

大東亞共榮圏の民族と思想

——社會史的素描——

金子鷹之助

昭和十六年三月六日、劃時代的大東亞戰爭が開始せられてから、大御稜威の下、皇軍の忠勇義烈によつて、太平洋、東亞、印度南洋の四千萬方秆、その包む陸地三千万方秆弱が、米英蘭より大東亞へ奪回された。今その内譯の大東亞戰前の尊嚴を本邦と女の如くである。

一、大日本帝國。面積七十萬方秆弱。人口一億強。諸民族を包含するも國民として一なり。思想は八紘一字の家族國家思想、惟神道思想、皇道思想、但之等はいづれも同一思想の別名である。

二、滿洲國。百三十萬方秆、四千三百萬、滿、蒙、漢、西、日五族協和。王道思想。其他少數オロチヨン族はシヤ
マン教、白系露人はギリシア・カトリック教。

大東亞共榮圏の民族と思想

三、蒙疆聯合自治國。三十萬人、蒙人、滿人。昭和十二年成立、蒙人はラマ教又は回教。

四、支那。一千万方籽弱。四億、主として漢民族。儒教、道教、三民主義、新三民主義。昭和十七年、夏の現状に於ては、汪氏指導下の國民政府に屬する、百五十萬方籽、人口二億の地方と、蔣介石の率ゆる邊疆とに分裂せるも、やがて後者は前者に併合せられんとす。北支は儒教、中南支は道教が多數を占めてゐたが、孫蔣の民國革命以後一度全支に三民主義が押冠せられ、支那事變以後北支は儒教の新民主義に戻り、汪氏の南京政府樹立後その政權下は新民主主義となり、南洋華僑八百萬は大東亞戰前は三民主義なりしも、戰後は皇道思想に轉向するであらう。

五、佛領印度支那。七十五萬方籽。二千三百萬人。内譯安南人千七百萬弱で七二%餘、カンボディア人三百萬で一三%弱、インドネシア人百萬で四%五、支那人三十萬弱で一%五、歐人は僅かに四萬三千で〇%二弱に過ぎず、そのうち支配者たる佛人はわづかに四萬弱、うち男二萬四千、そのうち軍人が一萬一千といふ状態である。その他の種族乃至民族としてはミン・フォン(安支混血)、泰人、馬來人、印度人、ミュオン・マン(ヤオ)、メオ等々。思想は安南人及びカンボディアの大部は北方(大乘)佛敎、インドネシア人及馬來人は回教。佛人の大部分はカトリック敎。ミュオン等の原始民族は精靈敎、呪術敎。印度人は印度敎。

支配者佛人は安南人の上流及知識階級をフランス文化に同化し、之を以て住民を懐柔せんと努力したが、可成りの生半可、不平等を生じた。政治的には交趾支那を直轄植民地とする外は、他地方を保護國とし之に骨抜的自治權を與ふ。經濟的には華僑及印度人を買辦、仲買、高利貸として、住民との間の中間機能に用ふ。大東亞の他の地方に於ても白人は殆どすべて、此の文化的、政治的、經濟的の二重支配機構を用ひてゐた。

現佛印地方の先住種族は、ミュオン、マン(ヤオ)、メオ等といふ原始種族だつたらしいが、古くより南方支那人が侵入して、大越、廣南なる二國を建てゝゐたのを清朝の初め頃、阮文惠なるものが攻略・統一して安南國を建て、次いで十九世紀初頭阮福映が佛國宣教師ビニョーの援助を受けて王位に就き、國を越南と稱し(一八〇二年)、清の保護國となつた。然るに佛王ナポレオン三世は佛宣教師が殺害されたといふのを口實に、十九世紀半過ぎに、軍を起して先づ交趾支那を奪取し(一八六一)、次いでカンボチャを保護國とし(一八六七)、東京地方を奪つて越南をも保護國とし(一八八三)、其後ラオスをも保護國とし、シヤムよりメコン河東岸を奪つた(一八九三)のである。フランスは一八八九年此地の統治法制を定め、コーチシナ及トンキンを屬領とし、安南カンボチャを保護國とし、以上の屬領、保護國を合せて、「佛領印度支那」と致し、始めサイゴンに總督を派したが、後(一九〇二)之を河内に移した。今次大東亞戰前我國の仲介によつて、メコン以東の地方が、佛印政府より泰國へ返還され、戰後佛印政府は我國と軍事經濟協定を結んで、大東亞共榮圈の一環として更生せんと努めつゝある。

六、泰國。五十萬方杼強。千四百萬人弱。泰人千三百八十五萬、九六%。支那人五十萬強、三%六。歸化支那人を入れると二百五十萬人。英人五萬六千、佛人四萬。其他ネグリート、オストロネシア族の馬來人、モン・クメール、ティベット・ビルマ。但右の英佛人等白人の中純粹なるものは二千人弱で、後はそれらの國籍下の馬來人、印度人等である。

ネグリート族以下の原始種族乃至民族を細分するは實用少きも、如何に民族が錯綜せるかの一斑を示さんに、ネグリートはスマン族、オストロネシアはマレー族、チャオナ族、モン・クメール族はサカイ族、ラワー族、カムク族、

大東亞共榮圈の民族と思想

4

チヨーン族、チャオボン族、ソー族、セーク族、カールウン族、カー・ブラオ族、カー・ヒンハオ族、スイ族、クメール族、モン族、西藏・ビルマ族はムッソエノ族、カンブリー・ラワー族等々を包含する。

かくの如く種族・民族が泰國に錯綜せる原因は、泰國が太古より民族移動の十字路であり、後印度の心臟だつたからである。此地方の先住民族はモン・クメール族であつた處へ、西亞中央部に發した泰族が東漸し、數千年前に南部支那に入り、西紀前八世紀半（前七五〇年）頃に南紹帝國を建設したが、蒙古族の大陸席捲に押されて、印度支那半島に民族大移動を試み、西紀後十三世紀初葉にスコタイ王朝を建設し、今の泰國の原本たるシヤム國を開いたのである。その後英佛勢力が侵入し、兩者の勢力均衡の下に獨立を維持して來たが、事實上は英人が王族と結托して政治・財政經濟を左右して來た。昭和八年陸軍將校ピン氏（現首相）等の無血革命成功し、コンタイ・ムアンタイ（自由の國、自由の民）を目標とする、立憲君主制の純獨立國を目ざして進んで來たが、大東亞戰勃發と共に、我國と軍事・經濟同盟を結んで遂に此の理想を實現した。

尚ほタイ族自身の複雑さを附記すれば、コンタイ、コラット・タイ、ラオ、シャン、ルー、プータイ、ヨー、キアイ、サム・サム等々に分れるが、之等はタイ族が、モン・クメール其他の先住後來諸族と混血したからである。

而して泰國人は南方（小乘）佛教徒であり、原始民族は回教又は呪術教である。

七、馬來。十三萬方籽、五百二十五萬。馬來族二百二十萬、回教。華僑二百二十萬、三民主義。印度人七十五萬人。其他原住民族たるネグリト、サカイ、ジャクン、オラン、ラウト（海の人）等々、回教又は呪術教。歐米人は三萬弱。馬歐混血二萬弱。

馬來族はスマトラのパレンバンやメナンカバン地方より、馬來半島に侵入し、原住民を山地に驅逐し、回教の土侯サルタン政治を行つて來た處へ、西紀十六世紀の始めポルトガルが、次にオランダ、最後に英國が此地を攻略したのである。而して英人は此地を開發（錫、ゴム）するに當つて、怠惰なる馬來人を嫌ひ、華僑、印度人を勞働者として呼寄せたが、之等の一部は上述の佛印、泰に於けるが如く中間支配階級に成り上つたのである。

八、ビルマ。六十萬方籽、千五百萬人。ビルマ族、九百萬人、南方佛教。シヤン族百萬、蒙古族の一種で回教徒。カレン族百四十萬。印度人百萬。支那人二十萬。歐人三萬、うち半數は緬英混血。

ビルマの原住民もネグリト族、タライン族等であつたが、西紀前九世紀頃より、西南支那より西藏支那族が南下侵入してビルマ人となつた。その後の歴史は沓としてゐるが、西紀後十一世紀の頃、アノウ、ラタ王がマンダレー盆地のバガンに、バガン王朝を建て、南方佛教を以て民心を統一し、元の入寇によつて衰へた後は、十六世紀にトングー王朝が起り、更にペグー王朝、遂に十八世紀半（一七五七年）に最後のビルマ王朝が出來た。

然るに既に印度に根城を築いた英國は十九世紀初半（一八二四年）に、國境問題を口實に第一次英緬戰爭を、一八五二年に第二次、一八八五年に第三次戰を仕掛けてビルマを攻略し、印度に併合して了ひ、一九三七年即ち昭和十二年にビルマを印度から分離して分割支配（印度にビルマの米と石油を、ビルマに印度の棉花、鐵等を供給することを牽制して）の方便にして來た。又こゝに印度人を勞働者として移住せしめた處、彼等がビルマ人の職場を奪つた外に、印度人高利貸（チャティア）が緬人を苦しめたので、反英運動の外に、反印運動が續發した所、英國は巧みに前者を後者に轉換して來たのである。尙ほ援蔣ビルマルトが開かれてから、支那人勞働者や軍隊が入り込み、皇軍の一撃

に敗走する際は亂暴狼藉を働いた。

今やビルマは皇軍監督下に、バ・モ博士を主席とする自治政府が成立（昭和十七年八月一日）して、一路更生の道を辿つてゐる。

九、舊蘭印。百九十萬方秆、七千萬人。うち六千八百萬人はインドネシア人、回教（バリ島人のみ佛教）。外に支那人百二十萬。歐人二十四萬、うち蘭人二十萬八千（但うち十五萬餘は混血）其他原始民族、特にニューギニアにはネグリート族。

インドネシア種族は各地方に五十種以上の部族乃至民族に分れ、言語、風習、宗教、文化段階を異にする。ジャヴァ島にはジャヴァ人、スンダ人、マヅラ島にはマヅラン（此の兩島がオランダ政府の内領で、他の諸島は全部外領であつた）、スマトラにはアチエ人、バタック人、パレンバン人、ランボン人、ミナンカバン人。セレベスにはマカッサル人、プギス人、ミナハサ人、トラジャ人、マンダール人。ボルネオにはバンジャル人、ダイヤク人、マレー人。バリ島にはバリ人。アンボンにはアンボン人。ニュー・ギニアはパプア人（ネグリート）。

オランダ政府が直轄したのは右の中の半分で、残り半分は政府監督下に、三百の土侯領に分割されてゐた。之等の下に族長的村落共同體も存続を許されており、白人經營のエステート、華僑の仲買及金融機關等々、所謂複合社會を形成してゐた。政府は住民保護の爲に公設市場（パッサール）や公設質屋を設けるし、農民は農業組合運動（ゲリンドー）を起して、華僑を抑壓せんとしたが、政府は反蘭民族運動を屢々此の反華運動に、轉換せしめて鋭鋒を推いて來たのである。

オランダは十七世紀初（一六〇二年）に、英佛と相前後して東印度商會を建て、一六一九年バタビアを東洋侵略の前進基地とし、既に百年以前に侵入してゐたポルトガル人が土人の怨みを買へるに乗じて、モルッカ群島、マラッカ、スマトラ、セイロンを奪ひ、既に一六〇九年以來我國にも來朝して平戸貿易に従事してゐたぐらゐに、東洋に勢力を築いた。ポルネオには英蘭共に進出したが、一八四二年に兩國間に協定が出来、北は英領、南は蘭領となつたのである。一六六六年の蘭英佛の商船敷を國力の指標とするなら、蘭九十萬噸、英五十萬噸、佛十萬噸の比率であつたが、やがて英國は、之を轉倒せしめたのである。海上權の爭霸史は十五世紀はポルトガル時代、十六世紀はスペイン時代、十七世紀はオランダ時代、十八世紀は佛英時代、十九世紀は英國時代、二十世紀以後は日本時代と劃すならば、諸國の海上權の盛衰を一目に知り得るであらう。東洋に於ては西廻り（南米迂回）のスペインが、米國に比島を奪はれた外は、印度、馬來、濠洲に於てはポルトガルをオランダが追越し、そのオランダを英國が追越したことになる。貪婪英國が東印度の大半をオランダに残し、印度支那をフランスに残したのは、制海權を握つてゐる以上、いつでも之等の地方を利用し得ると思つたからであらう——大東亞戰爭に於ける蘭印の如く。

一〇、英領ポルネオ。全ポルネオ島七十五萬方呎の北部五分ノ二、二十一萬方呎。三部に分れ、(一)北ポルネオは人口三十萬、マレー族の分派たるズスン族、回教。直轄（總督）政治。(二)ブルネイ土王國、四萬人弱マレー人。(三)サラワク英人王國、四十四萬、うち華僑十萬。

一一、舊比島。三十九萬六千方呎。千三百萬人。

最大多數はタガログ族、うち大部分はカトリック教徒、一部はプロテスタント。ミンダナホ其他の小島には回教

徒たるモロ族、其他呪術教の原始民族。

十六世紀初半（一五二一年）マゼランの攻略以來スペイン領となり、回教よりカトリック教へ改宗。十九世紀末（一八九八年）米西戦争によりグワムと共に米領となり、一部知識階級は新教とジャップ文化に化せられ、淺薄なる人道主義、民主主義、文化主義を口にしてゐる。

昭和四年以來の米國恐慌の際、米國は比島勞働者及び比島砂糖の移入を阻止せんが爲に、昭和二十一年に獨立せしむべき、タイディングス・マクダフィー法を作つたが、東亞侵略の爲の軍事基地としては之を維持せんとし、やがてA B C D包圍陣の一環、對日進攻の中間ルートに用ひ、遂に大東亞戦争に慘敗して、一切を喪失した。但カトリック化し、更に米國化する比島人を、大東亞思想に轉換せしめるには、餘程の忍耐と努力とを要する。

十二、印度。四百萬方籽、三億六千萬。うち（一）ネグリート、三百萬、原始教、（二）ドラヴィダ族七千萬、一部原始教、一部印度教等、（三）インド・アリア族二億四千萬、印度教。（四）アリオ・ドラヴィダ族、（五）シトウ・ドラヴィダ族、（六）モンゴロイド族、（七）モンゴロ・ドラヴィダ族、（八）トルコ・イラン族。（六）以下は回教徒七千七百萬。外に佛教徒一千三百萬、キリスト教六百萬、シーク（殺生禁斷）教四百萬、ジャイナ教百二十萬、拜火（ゾロアスター）教十萬。原始教は全部で八百萬。但種族と宗教とは交叉せる故に、種族別と宗教別とは必ずしも右の如く合致しないであらう。

尙ほ右の諸種族乃至民族は、横に四つの種姓階級に分たれてゐる。（一）波羅門（ブラフマナ）、アリア族、（二）武士（クシャトリア）、アリア族、（三）商工農民（ヴェシア）、アリア族、（四）奴隸（スードラ）、ドラヴィダ族、

此外に不可觸賤民（ハリジャン）といふ化外の民がある。この諸階級は世襲で、殆ど相互に交際しないのである。之はアーリア族が印度に侵入して來た時に、多數の異種族を統轄し、秩序づける爲に設けた種姓階級的差別（カースト）であるが、之に職業の差別が錯綜（其後はバラモンでも必ずしも僧職のみにあらずして、他の職業をも營み、クシャトリアも武士の外に種々の職業に就いた）して、益々對立を複雑化した。

のみならず、英國は全印度を直轄地と六百餘の土侯國に分割し、後者には利益を與へて二重支配を行つて來た結果、直轄地内で、反英運動が起つても、土侯國は常に英國に忠義を盡すといふ風に、分割支配してゐる。否、直轄地内でも印度教徒を主とする國民會議派（その主義は何教徒何民族をも入派せしめることになつてをり、現に議長アザットは回教徒である）、回教聯盟（總裁ジンナー）、印度自由聯盟（總裁サプルー）、ヒンドウ・マハサバ等々の政黨に分かれ、英國政府に操縦されてゐる。印度教徒と回教徒との宗派の争ひ、勢力争ひ、その他各宗派間の軋轢も、印度の統一的獨立運動の大障礙を爲してゐる。言語すら二百二十種以上に分れ、そのうち地方郵便局で公認せるもの七十種、最も廣く行はれてゐるヒンドスタニー語（サンスクリットとペルシア語との綜合）すら、一億二千萬人しか使はない有様である。その上に英國政府は英語を法定語としてゐるので、言葉の上からも無數に分裂してゐるのである。

抑も印度がかくの如く四分五裂の有様なのは、永き歴史的淵由による。最初印度に居た原住民はネグリートであつたが、太古にドラヴィダ族が侵入して來た。此の種族は農耕文化たる太陽巨石文化（*heliolitic culture*）を持つてゐた、褐色人種に屬するもので、メソポタミアの原住民たりし、スメル種族の一種でないかと考へられる。其の後から西紀前二十世紀頃に、中亞のアーリア地方からアーリア種族が侵入し、ヒンドースタン平原を占領して、ネグリー

ト族をヒマラヤ山麓へ、ドラヴィダ族をデカン高原へ驅逐すると共に、その一部を奴隸にしたのである。

又その後からペルシア人が拜火教を以て侵入した。このペルシヤ人乃至イラン人はアーリア族が、イラン高原の南麓に移住したものである。

更にその後からこのペルシア帝國を滅ぼした、マケドニア・ギリシヤ人がアレキサンドロス大王に率ひられて、インドス河畔迄を占領し、そこにギリシヤ風文化（ヘレニズム）を持ち込み、ガンダール藝術を生んだ。

西紀後七世紀以後になると、セム人種のサラセンが回教を以て、陸と海から侵入し、十四世紀になるとサラセンの東カリフ（教主國）を攻略した黄色人種の蒙古族が、回教に改宗した上で印度に侵入してモンゴル帝國を建設し、更に十五世紀以後には同じく回教化したオスマントルコ族が印度にも侵入し、十七世紀以後英國人が侵略し遂に之を併呑したのである。

十三、濠洲。七百七十萬方籽。七百萬人、その九割七分迄英人。キリスト教、民主主義特に勞働偏重思想。外に原住民（アポリヂン）五萬餘、その他僅少の歐米人とアジア人。一九〇一年嚴重なる移民制限法により、アジア人の移住を嚴禁し、白濠主義乃至英濠主義を採る。一九二五年には南歐人の移民をも禁止したのである。

原住民は羊狀毛種黑人種で、タスマニア族と呼ばれ、「烏」又は「黒インコ」と仇名される。又やゝ黒色の程度の薄い「鷲鷹」又は「白インコ」と呼ばれる原住民もあり、之はドラヴィダ族ならんとの説がある。一七七〇年に英人キヤプテン・クックがボタニー灣を發見し、一七八八年英國政府が最初の流刑囚徒をシドニー（ボタニー灣の改名）に入植せしめた當時は、百萬も居たと推測される原住民は、百五十年の間に英國の殺戮壓迫により、僅かに五萬に減

少し、その大部分は北部沙漠地帯に漂泊して、殆ど石器時代其儘の生活をしてゐるのである。

一四、新西蘭。二十七萬方籽。百六十萬。大部分は濠洲と同じく英人系で、一八四〇年以後植民し、原住種族たるポリネシア族に屬するマオリ族（約六萬）を壓迫しつゝある。マオリとは「光の子」の意味で、日子文化の系統を語る語である。

二

扱て以上の諸民族の諸思想を研究する必要は、その思想なり風習なりが、歴史上永い時間を経過したものであり、彼等の生れてから死ぬ迄の、死んだ後はその遺族や後裔たちの、生活そのものであつて、之を一舉に破壊改變されることは、彼等にとつては生命を奪はれるほどの脅威だからである。従つて「恐怖を與ふることを最大の拙策」とする政治は、社會學の知識を藉りて、その思想の根強さを測り識らなければならぬ。

社會學は社會結合の強弱を認識することを斯學の一目標とする。従つて社會結合の紐帶の一たる思想及びその表現たる風習（風習の意味を思想と看ても同じ）を研究目標とすべきは當然である。而してその思想風習の強弱を知る爲に、歴史に遡るべきは云ふを俟たない。歴史主義的思想社會學ともいふべきものがあつて好い譯である。それが社會の結合とか、種族・民族・國民の結束とかの、社會學的アプリオリに引つかけられる限り、哲學史・宗教思想史等より獨立し、社會學の一部門として成立し得やう。

然し此の一文は、歴史に遡るとはいへ、前史時代を研究目標とする、考古學や人類學の範圍迄に到底及ぶことはで

きない。それらも夫々の學として獨立専門化するものであり、社會學は手段としてそれらの知識を借用するものであるが、その考古學や人類學に未だ定説が尠いので、安心して借用することすら不可能なのである。

従つて本文は大東亞の諸民族思想に關係のある部分を、諸學より借用するに過ぎない。而してその部分とは印度をはじめ大東亞に移住して來たドラヴィダ族あたりからであつて、それ以前のシナントロップス・ペキネンシス（北京近くの周口店で發掘）やジャヴァのトリニルで發見されたピテカントロップス・エレクトスや、ネアンデルタール人はもとより、ネグリート族にすら及ばない。高々太陽巨石文化 (Heliolythie culture) を持つてゐた、農耕種族、特に東亞に關係のある、ナイル河畔のハム族、ティグリス・ユウフラテス河畔のスメル族——ドラヴィダ族はその一種ならん——黄河々畔の漢民族からである。

之等の農耕種族がネグリート種族を征服した時代の歴史は、まだ確立してゐないが、之等の農耕種族を狩獵・遊牧種族だつた、セム族やアリア族や蒙古族が征服した歴史は、稍々取るに足るものがあり、而して大東亞諸民族思想の強弱を知る爲には、是非とも其處まで遡らねばならぬのである——尤も此の短文は、ホンの暗示を與ふるに止まる處の素描に過ぎないが。

考古學者が「太陽巨石文化複合」といふのは、新石器時代 (neo-lithic) の文化が、西アジアからエジプトに亙る地域に起つたもので、之が北東に向つてはシベリアを通じてアメリカに廣がり、東に向つては支那に入り、東南に向つてはイラン、印度、ビルマ、印度支那、馬來半島、インドネシア、メラネシア、ポリネシア、メキシコ、コロンビア、ペルー等に流布したものであるが、その共通の特徴は十三點ほどを挙げられるといふ。

(一) 河川文化又は農耕文化たること、雑穀耕作の如き灌漑治水を爲すこと、(二) 研磨石材を用ひ、石像彫刻、石造神殿・城廓・橋梁等を造營すること、(三) 土器製造、(四) 金屬細工、(五) 眞珠採集、裝飾及び呪術に用ふ。(六) 太陽崇拜、(七) 天界と關係ある日子の階級と地下と關係ある武將階級との二類の支配階級、前者は神婚によつて生れ、族内婚を實行する。(八) 靈魂不滅の信仰と木乃伊の製作、(九) 母神崇拜、(十) 人身御供、農業及母神崇拜に關聯す。(十一) 母權制度、(十二) トーテム組織、(十三) 一般人民の異族結婚。

以下之を先づエチプトに就いてみやう。

ハム種族のエチプト人が、始めエチプト沙漠地帯に漂泊してゐた、狩獵・遊牧種族であつたかどうかは判らぬ。又ナイル峽谷に先住種族がゐたかどうか、それがネグリトであつたか、そのネグリトが既に農耕文化を持つてゐたかどうかは判らぬ。此地方ではユウフラテス河畔のスマル農耕種族を遊牧族たるエラム族やセム族が、又黃河畔の漢農民を蒙古遊牧族が征服した、といふやうな定説はまだ立たない。ナイル河畔文化史のうち、西紀前五千年頃までの傳説時代でも、既にハム族の農耕時代である。然しナイル河治水事業の爲め小國家群が成立し、下流地方を赤王、上流地方を白王が治めたといふ此時代は、北支の三皇三帝時代と同様に、沓としてゐる。

エチプトの歴史は西紀前四千四百年頃、メネス王が上下兩地方を統一し、ナイル・デルタの咽喉に當るメンフィスに都したのを以て始まると看る。之を第一王朝とし以後第十一王朝迄を古王國、西紀前二千年頃諸侯の一人が、ナイル上流テーベに都して建國したる第十二王朝から第十七王朝迄を中王國、西紀前五百年代に同じくテーベに起つた國粹軍の將アーメス王が、二百年間も下ナイル地方に侵入してゐた、アラビア、シリアの遊牧民たるヒクソス族を驅

逐して建てた第十八王朝から、前六七二年のアッシリア人の侵入を経て（一時之を撃退）、前五二五年ペルシアに滅ぼされた第二十六王朝迄を新王國の時代とする。

エジプトの國家生活と文化とが確立したのは、古王朝時代の第四王朝のクフ王（西紀前三千七百年頃）の時、此の時ナイル左岸のギゼーに大ピラミッド（金字塔）、オペリスク（方尖塔）、スフィンクス（人頭獅身像）、ラビレント（螺旋）、其他石造の神殿、宮殿等、所謂太陽巨石文化と象形文字（Hieroglyphic Letter）が確立せられた。

太陽はオシリス（又はラー Ra 又はアモン Anon）といふ主神の化身である。オシリスは河川經濟にとつて最も重大なる收穫神であるから、收穫にとつて最重要なる太陽に化身するし、又同じく重要な河川治水の主役たるファラオー（エジプト王）に化身する——その王の像はスフィンクスの人面に、王の權力はその獅身に、巨石文化の形で表徴される。

收穫の神は又種子の神でもあり、かくて繰り返へし死に、繰り返へし生きる不死不滅の神である。そしてエジプト人ほど不死不滅を願求した民族はない——靈魂不滅はエジプト人の信仰の中核であつて、靈は一旦人體を去るが、オシリス神の現前で、生前行爲の善惡を秤量せられたる後、輪廻して再び尊卑の人體に戻るといふ、輪廻物語が「死の書物」（トートエン・ブック）として、パピルス（ナイル河畔の水草より製したる紙）に誌されたものが、ピラミッドの中から出て來た。ピラミッドは屍をミイラとして保存し、靈がその人體へ輪廻歸還するのを待つ爲の、保管庫であると共に、農業に緊要なる天文觀測所であつた——。そこで種子の神は又、没しては昇る太陽ともなれば、自己の卵を埋めては再生する聖甲蟲にも化身し、多神教の度合、自然物動物崇拜（アニミスムス、フェティシスムス）の程度

が進んで行く。

牛は農業に於ける役牛・駄牛として、牝牛は同時に乳牛として崇拜される。故に牡牛（アピス）は産みの主神オシリスの化身であると考へられ、牝牛（ハートル）は女神イシスの化身であり、イシスは又、三日月に象徴される。

こゝで生産・乃至増殖は、動物的・人間的行爲を機軸として考へられ、主神オシリスと女神イシスは聖合したる後、オシリスは死ぬが、イシスはホルスといふ子を産み、ホルスは生長して再びオシリスとなる。ホルスは又、鷹神に化身し、鷹は埃及王即ちファラオの靈の象徴であり、黎明が又鷹乃至ホルスの象徴である——そこで母なる神イシスの人形像は嬰兒のホルスを腕に抱いて三日月の上に立つてゐるところであり、エジプト人はその前にひれ伏して、收穫増殖と不死不滅を祈るのである。

尙ほ多神教に走つて、エジプト人は善神の化身として猫、鱈（四肢を金輪で飾つて檻に養ふ）を崇拜し、悪神・邪神——その象徴は闇である——の化身として、犬頭のアヌビス神を祠り、之れが善神や人間を喰つたり誘惑したりしないやうに祈るのである。

さて以上簡単に素描されたエジプトの宗教史も、既にその裏に征服・被征服の政治史を含むものであつて、征服者乃至征服國の神が主神となり、被征服者のそれは従身乃至邪神となつた諸神混合 (Theocracy) の結果であり、それはエジプト内諸地方の群雄統合の結果でもあれば、又外國との征服・被征服の結果でもある——この宗教史と政治史との關係の史實はまだ明かにせられてゐない。しかしこのエジプトの諸神混合の形態は頗る強固なものであつたと見えて、エジプトを征服した國も、エジプトに征服された國も、宗教はすべてエジプト化された——少くとも外形に於

ては、神の名前が代る位であつて、主神が太陽神たること、靈魂不滅を信ずること、石像宮殿を造ること——尤も石の不足せる處ではピラミッドは造らなかつたが、生贄を捧げること、之れを司る司祭・僧侶階級が權勢を握ること（自ら王となる神裁政治 Theocracy か、或は王の上に立つて政治を左右する高教政治 High-Churchism）、無數の多神・邪神・淫祠、祕法・呪術の出現等々。——たゞユダヤ民族のみは、外形（神殿・生贄、僧侶、神託）に於てはエジプト化されたが、信仰内容に於いて、一神教たること、その一神が民族と特別の關係に立ちながらも普遍的宇宙の創造・主宰神たること、やがてそれが普遍的正義神、普遍的慈悲神へ、即ち世界教の神へ發展する萌芽を胎んでゐた點に於て異つたのみである。

上述の新王國時代第十八王朝のツトモシス（トトメン）三世は西紀前第十五世紀中に五十餘年治世し、十餘回外征し、エジプトのアレキサンドロスといはれたほどの版圖膨脹を來たし、東はユウフラテス河、西はリビヤ沙漠、南はヌビア地方までを攻略したが、此頃は既にユウフラテス河畔には、スメル種族の文化はもとより、スメル族を攻略したセム族の遊牧文化たるバビロン、アッシリア文化もあつたし、パレスティナにはバビロンから追放された、同じセム族のヘブライ人の文化もあつた。スメル族はエジプトのハム族とは獨立にか又は傳授されてか、太陽巨石文化を持つてゐたし、バビロンのセム族は此のスメル族か又はエジプト人から此の文化を傳承したのである。

エジプト的宗教文化が如何に強靱であり、且つ傳播力を有するかを、最後に附加しておこう。エジプトはしばしば遊牧民たるセム族に攻略されたが、決してその宗教文化を棄てず、逆に之を感化したと同じく、後にマケドニア・ギリシアのアレキサンドロス大王に攻略され、そのギリシア帝國が大王の死後三分裂して、エジプトにはプロトレマウス

王朝（前三三―四〇）が立つて、アレキサンドリアにヘレニズム文化を興したけれども、宗教文化は不相變太古エジプトの傳統を曳いて行つた。アレキサンドリア市にはセラベウムといふ大寺院が、プトレメウス一世によつて建立されたが、其處に祭られた神セラピスは舊來のオリシス＝アピスの別名であり、之と女神イシスと子神ホルスとが、唯一神の三個の相貌乃至三位一體と看做された。この諸神混合と一體化は到る處に弘まつて行つた。即ちセラピスはギリシアのゼウス、ローマのジュピター、ペルシアの太陽神アールウラ・マツタと同一視せられたし、ユダヤ教は假令太陽神を崇拜しなかつたとするも、エジプト式の神殿・犠牲・司祭・神託制度を受け繼いだし、ユダヤ教の一轉したキリスト教では三位一體論を造り上げたし、印度教はシバの神が一體三面（創造、破壊、保存）を備へたり、そのシバとヴィシユヌとブラフマンの三神が同一視されたのである。

三

西紀前六千年乃至七千年頃、即ちエジプトの赤王・白王と同時代の頃、ティグリスとユーフラテスの「河の間」(メソポタミア)に、褐色人種のスメリア(Sumeria)人が、農耕的太陽巨石文化と數多の都市國家を造つた。彼等は既に楔形文字 (Cuneiform letter) を、河底の泥を日光で乾燥させた精巧な煉瓦に、彫りつける程の文化を持つてゐた。この煉瓦で塔形（此上で星の觀測も行はれる）の大寺院を建て、各都市独自の神を祠つた。エレクといふ都市は、最初の帝國に發展し、エレクの神とそれを祠る僧侶兼王は、ペルシア灣から紅海までを支配したといはれる。文字の發明によつて法律、命令、契約等が傳播されたり、記録されたりできるやうになつたので、都市帝國は更に大なる國家

乃至帝國にも發展し得たし、又連續的な歴史意識を可能ならしめたのである。

スメリア人は農耕が本職であつた。そして馬は持つてゐなかつたが、牛、羊、山羊、驢馬を持ち、槍、皮の盾を以て密集歩隊戦法を取つた。又青銅、銅、金、銀、隕鐵を知つてゐた。

このスメリア族は、先づ南ベルシアの黒人型の遊牧人種たるエラム人に攻略せられ、次に西紀前二七五〇年頃には、アラビアの遊牧者たるセム種族に併吞せられた。即ちセム族の族長サルゴンは全スメリアを征服し、ペルシア灣から地中海に至る世界の支配者となつた。而してその國民たるアツカディア人はスメリア文字を學び、役人や學者もスメリア語を採用したほど、スメリア文化は強靱であつた。

サルゴン帝國が二世紀ほど後に滅び、もう一度エラム人がはびこつた後に、新セム族のアモール人が侵入し來たつて、ユウフラテス河畔の小都市バビロンに都し、第一バビロニア帝國を建設したが、然しバビロン人も亦スメリア人種と同化し、スメリア文化と多神教とを繼承したのである。而してハムラビ大王が西紀前二千二百年頃、世界最初の法典たるハムラビ法を造つて、此の帝國を法制的に固めたのである。

バビロン人の多神教は、スメル人から直接に受け継いだのか、又はエジプトの影響が此地方に及んだのを間接に受けたのかは判らぬが、農耕宗教的であつて、主神ベル又はパール (Bel, Baal) は太陽神であり、之に、月の神シン (Sin)、水の神 (Ba)、愛と美の神イシュタール (Ishtar) 等が配せられ、之に無数の邪神妖怪が錯綜し、人間は善神に祈禱、犠牲を捧げて邪神を克服して貰はねばならぬ。茲に善神を祠る神殿と祈禱・魔法を仲介する僧侶とが生じ、

僧侶が天地創造説や罪惡洪水説や占星術・天文學・七曜制、エジプトの太陽曆に對する太陰曆を創り、之れがハムラビ法典と共に、東は印度、支那其他東亞諸地方、西はシリア、パレスティナ、小アジア、ギリシア、ローマにまで傳播した——ヘブライ民族の舊譯聖書が如何に如上の諸思想を採用せるか一目瞭然である、エデンの樂園はバビロン近傍であるといはれるし、又モーゼの十誡はハムラビ法典を採つたと考へられる——此の法典は二十世紀初フランスの學者が昔のスザ市の廢趾から發掘し、世界最古の成文典と銘打つたもので、二百八十二條より成り、宗敎法・社會法・地主小作人法・親族（夫婦關係）法、商工業法等を含むものである。

ヘブライ民族もセム種族の一類で、バビロン帝國內のユウフラテス河畔のウル地方に同居してゐたが、その頑固なる一神敎——何故か此の民族のみが當時一神敎徒であつた——を嫌はれて追放され、西紀前二千年頃族長アブラハムに率ひられて、カナン人の住む地即ち今のパレスティナへ移住したのである。彼等は一神敎は固執したが、如上の傳説や神殿・司祭・犠牲・神託等々は矢張り、エジプト的、スメリア・バビロンのものを繼承した。

扱てネグリート族が先住してゐたインドへ、アーリア族よりも先に侵入したドラヴィダ族は、褐色人種で太陽巨石文化を持つてゐたから、スメリア種族の一類であると考へられる。彼等はインダス河邊、ガンヂス河畔、プラマプードラ河畔に、即ち後にヒンドースタン平原といはれる地方に、農耕文化と多神敎を植へつけてゐたに相違ない。が、次に入つて來て、ドラヴィダ族を征服乃至驅逐し、如上のヒンドースタン平原に河川農耕文化を拓いた、遊牧種族たるアーリア人種がその多神敎たる印度敎を、此のドラヴィダ族から受け繼いだものか、スメリア人又はバビロン人の影響を受けたものかは判然としない。唯だ印度の語源がシンド (Sind) であつて月の神を意味し、それがバビロンの

月の神シン(Sin)より來たことは考へ得ることなので、アリア人種は深くバビロン文化の影響を受けてゐたと推測し得る。

四

アリア人種は、ライン河からカスピ海の東南方にかけて住んでゐた、狩獵・遊牧の蠻族である。西紀前二千年頃は、此の地方は今より溫暖濕潤で森林に富んでゐたらしい。彼等は白色金髮碧眼ブルジョウの北歐人種ノルディックであるが、然し黃褐色人種との混血が多いので、暗白色ダークホワイや淡褐色等々交々であつた。然しアリア人種を見分け得る重大なる特色は言語、神話、吟詠、風習、儀式等が共通だつたことである。

例へば神といふ語は印度では *Dyaus*, ギリシアでは *Zeus*, ローマでは *Jupiter*, 古代ノルウェーでは *Tiu*, 古代ドイツでは *Tiu* 等といつたが、皆「輝く」といふ同一語源 *div* 又は *di* から出てゐるのである。即ち天空を神として仰いだのである。従つてエチプトやメリアやバビロンと違つて、地方的部族の神々が少くて、自然を神格化せる普遍的の神々が多く、従つて汎神教又は萬有神教の傾向を取つた——此の傾向はギリシアへ入つたアリア人が典型的に發展せしめたのである。

然しながら尙ほ抽象的思惟方法が發達しない時代のことであるから、抽象的一神教ではなくて、依然として多神教であり、而してセム族特にヘブライ族の神人懸隔の超越神教とは違つて、神人同格教であり、神は甚だ人間的であり、人は容易に神に上り得る。而して運命觀が強く、神と雖も人畜と同じく、運命に逆ふことが出來ない。

かくの如く神が人間に近いから、怖るべき超越神と人間とを仲介し、神を宥めたり、神意を人間に宣託したり、人間の懺悔謝罪を神に仲介したりする、物々しい・僧侶・寺院・神殿・生贄・宗教ではなくて、民衆が自由に接し得る朗らかな神々を崇める宗教であつた。従つて政治も神王乃至僧侶王が民衆を支配するのではなくて、英雄が民衆を指導する貴族主義政治であつた。家も家長主義、祖先崇拜であり、埋葬は多く火葬で遺骨を圓塚に納めた點も、太陽巨石文化種族乃至民族の長塚に土葬するのと異つてゐた。恐らく彼等の住地に巨石がなかつたことも、神殿・長塚宗教を採り得なかつた一因であらう。

彼等は最初は馬を有せず、牡牛を以て小麦を作つた。然し蠻人の本能として、忍耐力を要する定住農業を嫌ひ蔑すみ、收穫した後は遊牧の爲に、天幕や家具や收穫物を牛車に積んで移動するのが常であつた。此の移動のうちに太陽巨石文化種族乃至他の遊牧種族と接觸し、見聞を廣め、石造石細工も覺えれば、礦物も發見し、始めは青銅しか持つてゐなかつたが、西紀前千五百年頃には鐵の精鍊を發見乃至發明し、又馬をも入手し飼馴らすことを覺えた。かくて馬に乗り、鐵製の武器を持つて、森林草原を縦横に驅馳する、慄悍な騎兵、漂盜、貿易者が出來上つた。

やがて彼等は人口の増加、食糧の不足するに伴れて、四方八方に進出侵入を企てた。西方へ行つたものはヨーロッパ人ととなり、南下したものはペルシア人となり、西南下してヒンドゥクシ山脈を越え、カイバル峠を突破して、印度へ侵入したものが、アールリア印度人となつたのである。

21
彼等は先住種族たるドラヴィダ人を南方デカン高原に驅逐するか或は之を奴隸にしつゝ、インダス河畔から、ヒマ
ラヤ南麓を東進してガンヂス河畔、プラマブードラ河畔を占領し、ドラヴィダ族の河川農耕文化と太陽巨石文化を受

け繼いだり、破壊したり、之と混淆したりした——之は今までも尙ほ續いて來たことなのである。

アーリア宗教の印度に於けるこの混淆が、印度教であり、それは印度の社會相と同じく複雑そのものである。

印度の新石器時代の原々住民は、チベット・ビルマ族、コラリア族 (Koraians) 等といはれるが、後者は亞濠(オーストロ・アジア)系に屬するネグリートではあるまいか。之等の原々住民の居た所へ、スメリア種族の一種たるドラヴィダ族が、高度のスメル文化を以て、西北印度に侵入し來り、インダス河の上下流、パンジャブ、シンド地方に侵入し、西紀前三十五世紀頃、既にユウフラテス河畔に於けるスメリア族と同じく、都市的聚落を形成し、彩色土を製作し、精巧なる裝身具を着用してゐた等、驚嘆すべき文化生活を爲してゐた事が、考古學的發掘によつて實證せられた。恐らく太陽巨石文化の一面として、農耕、神殿、神像、僧侶等々も既に出來上りつゝあつたのではあるまいか。之れが遊牧種族たるアーリヤ種族の侵入に對する、原住民並に原文化であつたらしい。

アーリア人は二回に互つて、印度へ侵入した。第一回は西紀前二十世紀頃で、中央アジアのオクサス河畔の遊牧地より大移動を爲し、ヒンドゥクシ山脈を越えて、印度西北部の五河地方(インダス河、サトレジ河及び之に注ぐ三支流)に入り、先住民族を驅逐すると共に一部を奴隷にし、所謂ヴェーダ(吠陀)文化を開拓して、ヴェーダ・アーリアとなり、四種姓階級制度を建て、次いで南東下して、ガンヂス河、ジユムナ河畔まで、所謂ヒンドゥクシ平原を占領したのである。

第二回に侵入したアーリア族は北方パミール地方から山越えで、或はメソポタミア方面から海越えでやつて來て、ヴェーダ・アーリア人を壓迫しつゝ、中部印度の西、南、東部へと迂回し、ヴェーダの文化、祭祀儀禮に反對し、先

住民族との混血も行へば、階級制度も嚴重にしなかつたので、之を非ヴェーダ・アーリア人と呼ぶ。後年階級制度を否定する佛教や耆那教ジナイや毘紐派の教團は後者から起つたのである。

かくインダス、ガンヂス上流地方に定着したアーリア人の村落は、その人口が増加するにつれて、幾百幾千の分派に對立鬭争し、大小數十の王國の出現を見、之等がまた前十二世紀頃に二派に分れて、クルーシエトラ (Kurushtra) の野に數旬間戦つた。此の戦争の國民的詩史が有名なるマハーバラタ (Mahabharata) で、恰もギリシア・アーリア種族が、セム種族のトロイ市を攻撃した詩史が、ホメロスによつて作られたのと似てゐる。

此の西紀前十二世紀頃より、北部印度に強大となつた國家は、マガタ (摩伽陀) 國で、之が前六世紀頃シスナーガ (尸修那伽) 王朝となり、その第四世の孫ビンビンサーラの時代に釋迦が出たのである。然し先づ、釋迦をして憤激蹶起せしめた、印度アーリア人の宗教即ち印度教の多神教、自然崇拜、その複雑怪奇性、その社會的、民族的反映たる種姓制度を豫め知らねばならぬ。

先づ正統印度教 (波羅門教) の根本聖典たるヴェーダ (吠陀) が、リグ・ヴェーダ (梨俱吠陀)、シヤマ・ヴェーダ (娑磨吠陀)、ヤジュール・ヴェーダ (夜柔吠陀) —— 之が黑白兩夜柔に分れる ——、アタルヴァ・ヴェーダ (阿闍婆吠陀) の四種に分れ、前二者は天地自然神に對する讚歌で、其中第二のものは特殊の祭の際に諷詠するもの、第三のものは祭式に關するもの、第四は呪文である。之は狹義の吠陀で、廣義のそれは此の四吠陀をサンヒター (本集) とし、之にブーフマナ (波羅門書) 即ち祭式に關する神學書 (以上二者は天啓書) 及びスートラ (經) 即ち隨間經、家庭經、律法教を附加したるもの、之等が又多數に分岐して行つて複雑になる。この傾向はセム族のユダヤ教の舊約

書、キリスト教の新約書の如く簡單に行かないのである。ヴェエグが讃歌たることは、吟詠の好きなアリア人種の持ち込んだものであるが、それが實體的に複雑化して行くことは、何かそこにアジア的、ドラヴィダ的のものに負けた所があるからではなからうか。

同じやうにギリシアへ侵入したアリア人種が、そこにあつたエジプト的・クレタ的地中海文化——太陽巨石文化を漸次簡單化して行き、遂に抽象的普遍論たる汎神論と理論哲學と自然科学を生んだのと異なるのは、印度的アジア的農耕文化が、地中海的なるものよりも、より根強く粘り強いものだからではなからうか。

神學書たるブラーフマナの最後部を爲す、哲學部門としてウパニシャッドが造られ、之が印度哲學史の第一期を爲すものであるが、ウパニシャッドそれ自體百八種に分れるのであるから、爾後の哲學史がギリシア哲學史などは、比較にならぬほど複雑多岐に分派し且つ錯綜せることは、當然である。

ウパニシャッドによれば、「梵」(ブラフマン Brahman)が、最高神であり、宇宙の創造・保存・破壊即ち生住滅を司る神である。然るにやがて「我」(アトマン Atman)の思想が發達し、之が梵と同一視せられるようになった。我は超個人我及び個人我の兩者を含むものと考へられ、宇宙及び個人の實在本體を爲す。而して超個人我の本體は「識」であり、之が「有」(サート *sat*)であり、梵であり、是より一切現象が發展流出すると説く。之が變轉説(パリーナーマヴァアダ *parinamavada*)であり、梵我一如の認識を解脱と説くものが、解脱論である。然るに此の各部分の發展やら、駁論やら、折衷やらで印度哲學は無限に複雑化して行つた。

即ち吠陀は開闢神話時代のもの、ブラーフマナは開闢原理探究時代のもの、それに續く西紀前八世紀以後は、上世

正統波羅門派のウパニシャッド（「近侍」の意味で正統派間のみ師弟秘密に相傳す）時代、同六世紀より非正統派哲學時代に入り、先づジャイナ（耆那）教、佛教起り、次いで前五世紀半より數論派、ヨーガ（瑜伽）派、前三世紀以後の中世では佛教文獻家、前二世紀から聲論派、前二世紀半から勝論派、紀元後一世紀半より大乘佛教に龍樹提婆の中觀派出で、二世紀にヴェンダタ（吠壇多）派、二世紀半頃より正理學派が起り、佛教では三、四世紀に唯識宗が起つて、大乘佛教を大成した。近世初三世紀半のグプタ王朝では、註釋祖述派と佛教との間に論争多く、十一世紀以後は回教が入り來り、十三世紀後の最近世では回教王の活動に次いで、歐洲人が西洋哲學やキリスト教を持ち込み、印度人は専ら宗教的活動に偏した。

印度教も複雑怪奇に發展し、大史詩マハーバラタ以後、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァをそれ／＼主神とする派に分れ、これらが又無數に分岐して行つた。茲に一々列擧する必要もないが、シヴァ派の中にも、シヴァの性を崇拜するリンガーヤト派、シヴァの配神の性を崇拜するシャークタ派、シヴァに關係あるガーナパチヤ（聖天崇拜）派、サウラ（太陽崇拜）派、その他吠壇多學派の行者やその他の苦行者も居るといふ有様でもあり、それが又カシミール地方とかドラヴィダ地方とか、地方／＼で又分れてゐるといふ複雑さである。

やがてヴィシュヌ、シヴァの兩神が勢力を得て來ると、ブラフマーは此の二神と、エヂプト教に於けると同じく、三位一體（トリムールティ Trimurti）と考へられるに至つた。然しブラフマーは尙ほ印度教の主要神として崇められ、印度人は三面四手で、吠陀、珠數、水瓶を持つ像に現はして、禮拜してゐる。

ヴィシュヌ（Vishnu 毘瑟怒）は太陽神で、同時に死者の樂園を意味し、漸次勢力を得て、ブラフマン及びシヴァと

對等又は以上のものなり、一面四手、龍蛇の上に仰臥し、臍より蓮華出で、其上に梵天の坐する像にて禮拜せられてゐる。ヴィシヌスが魚、龜等多くの垂迹權現神を有するとせられたり、又他の神々と同視混淆せられて、複雑である。

シヴァ(Śiva 濕婆)はもと嵐の神ルドラであつたが、此神は同時にシヴァ即ち吉祥といふ形容詞を附けて呼ばれてゐたので、やがて形容詞の方が獨立して、三大神の一となり、破壊神たると同時に、創造神兼保存神で、生殖器(リంగా)崇拜と結びつけられ、又自在天(イスマアラ)、大自在天(マヘスバラ)と稱せられて、複雑怪奇である。一面、三目、四手の怖ろしき形相で、三叉戟、鼓、棒、繩を有する像で祠られ、他の二神と同等又は以上で崇拜されてゐるのである。

以上の如く印度教はもと遊牧アーリア人の思想として一神教に近く、梵天即ち全知全能・遍照包括の神が、一切の宇宙・人類を創造し、それらの榮枯盛衰の運命を支配するのであるから、人間は此の神の慈悲に縋り、運命に身を托して、安心立命せよといふにあつた。然るに此の唯一の神が、種々雑多の森羅萬象に化身すると考へることから、萬象そのものをも神と信じ、山でも川でも、牛でも犬でもを崇拜する多神教、自然崇拜教或は物活教に一轉し、複雑怪奇なる邪神淫祠を拜むやうになつた。今その一、二の例を擧げて、彼等の民族性を識ると共に、その後侵入し來たつた異民族異文化との錯綜の跡を釋ね、併せて我々が印度人に對する場合の用心に備へやう。

例へばヒマ(雪の意味)ラヤ(倉)は印度人にとつては、最も聖なる神であつて、日夜崇拜かざるものであるから、外來者は決して之を穢してはならない。白人がヒマラヤ「征服」と稱して、威張つた態度で登らうとするから、神の怒りに觸れて、いつも死傷者が出るのだと印度人は信じてゐる。先年印度に大地震があつたのも、白人が強いて

登山を試みたからだ、信心深い印度人は恐れを爲してゐるのである。我々が大東亞建設の爲に、ヒマラヤの科學的調査をしなければならぬやうな場合には、須らく富士山や御嶽へ登る時のやうに、六根清淨の精神を以てしなければならぬ。

又このヒマラヤの雪解の水がつくる河川を、神として印度人は崇拜してゐる。例へばガンヂス河は河長千五百哩、流域四十三萬方哩、支流、ヤムナ及びフーグリ河を加へて、三河の畔に十餘の大都市あり、之等の地方に印度教や佛教の始祖や偉人が生れ、經濟的にも其の地方即ちベンガル州は、昔も今も印度最大の富源をなすものであるが、印度人は此の偉大なる大河を女神として崇め、梵天即ち創造神の瓶子から、三河となつて、天界から人界に降つたものと信じてゐる。昔、或王の眷族六千人が將に涸れたる海底の枯骨とならんとしたるを、ガンヂスの女神が救ふて、之を天界に蘇生せしめたといふ、傳説もある。

かくて印度人が河川に浴するのは、單に暑熱を拂ふだけではなくて、神の恵みに浴し、その身を清淨にせんとする意味がある——此點インドネシア人やマレイ人のマンデー（水浴）とは異なる——ので、外來人は河川を尊重して、之を汚さぬやうに努めねばならぬ。

又印度人は牛を神の化身又は「使ひ」として尊敬してをり、牛がゴロ／＼往來に寝をべつて交通の妨害をしてゐても、敢て逐ひ拂はふとせず、牛糞をすら押戴くといふ有様である。後に印度に侵入して來たアラビア、蒙古、トルコ等のイスラム教徒（マホメット教徒、回教徒）は豚を禁厭してゐるので、老獪なる英國人は印度教徒に豚を殺させて回教徒の村に投げこませ、或は回教徒に牛を殺させて印度教徒の村に抛り込ませ、彼等を仲間割させて、即ち一つ

の力になつて反英運動を起さぬやうに操つてゐる。之を分割支配政策といふので、其の原因はそも／＼印度教徒や回教徒が、餘りにもつまらぬ迷信を持つてゐるからだが、然し我々が彼等に接する時は、いきなり之を迷信として禁壓したり侮蔑することは、彼等の何千年といふ永い間の信仰や風習を破壊して、餘りに大きい混亂を惹起し、憎惡を買ふことになるから、八紘一字の精神と、科學思想とを以て、徐々に教化誘導して行くことが必要である。

以上の如くアーリア人は、印度の先住種族を統一せんが爲に、印度教を弘めたが、もう一つ階級制度を嚴重に確立して、社會國家の秩序を保たんとした。それは種族別に階級を律するので、種姓階級制度と呼ばれてゐる。

この印度の複雑峻嚴な種姓（カースト *Caste*）制度も吠陀に表はれた印度教から出て來てゐるのである。ラテン語の *Castris* は「血の純血」即ち種族の純粹性を意味するものであり、古代印度の梵語（サンスクリット）では「色」を表はすヴァルナ（*Varna*）なる語を以て種族の差別を維持せんとしたのである。即ちリグ・ヴェーダの第十卷の創造讚歌には、諸神が「原人」（プルシヤ *Purusa*）を祭獸として祭つた式典の結果、その各部分より萬有が展開流出し、特に口より「波羅門」（ブラフマナ *Brahmana*）即ち僧侶階級を、その双腕より「王族武人」（*Kshatriya*）、その雙眼より「吠舍」（ヴェイシヤ *Vaisya*）即ち農工商階級、その兩足より「首陀」（スードラ *Sudra*）即ち奴隸階級を生じたとなし、前三者はアーリア種族が占め、奴隸階級に被征服ドラヴィダ種族を押し込んだのである。而してマヌ法典の第十章は之を嚴重に法制化し、而も漸次發生し來れる六系列六十數種の、複雑なる副次種姓をも之に加へ、かくて逐次、職業の世襲、その職業による社會階級の成立、階級外者に對して、結婚食事等に關する極端なる排外感情と習慣が生

じて來た。結婚に就いては同種族結婚 (endogamy) とハイパーガミー (hypergamy) が行はれる。ハイパーガミーとは (一) 上位階級の男子は自己階級並に次位階級の女子と、下位階級の女子は上位階級の男子と通婚することはできが、下位階級の男子は上位階級の女子と、上位階級の女子は下位階級の男子と通婚してはならぬ制度である。而して妻が次姓の種族に屬する時は、新出生の子女は妻の種姓に屬し、新種姓を生じないが、その妻が一層下級の種姓に屬する時は、子女は別個の種姓に屬せしめるといふ複雑な制度を生んだ。例へばバラモンが王族の女を娶れる際は子女は王族に屬し、ヴェイシヤの女との子女はアンバスタ (Ambastha) なる一種姓が出來て、醫療を業とするのである。而して如上の規則を破つて、違犯結婚をせる場合に生じた子女は、チャングラ (Chandala 旃陀羅) なる非人階級に落され、一生村落外に死者の衣を纏ひ、破れ皿にて飲食し、死刑執行人の職に従事しなければならぬ。かゝる複雑なる制度の結果を、一九〇一年の調査に徴するに、二千三百七十八のカーストを數へ得たといふことである。

古代印度ではバラモン階級の思想上社會上の專横に抗して、釋迦出で、佛教を唱へ、一切衆生の平等濟度に乗り出した。

釋迦牟尼は西紀前五世紀半前 (前四六六)、カピラ (迦毘羅) 城の、釋迦族の王家に生れ、二十九歳で出家し、三十五歳で正覺成道し、爾來四十五年間衆生濟度に從ひ、前四世紀の始めに、八十歳で (前三八六) 入滅した。聖人を意味する牟尼や、覺者を意味する佛陀又は佛をその本名に附けて、釋迦牟尼佛と尊稱される。出家後諸處の先覺を訪ふて教へを受け、或は自ら難行苦行して、遂に大覺成道したのである。その教へは單純素朴な解脱教で、心の不苦不樂の中道即ち涅槃道を説いたのである。是れが恰もパリサイ派の律法神學宗教に對する、キリストの素朴なる良心宗

教の効果と同じく、印度教の波羅門によつて支配窘迫されてゐた、貧困無辜の民衆の歸依を得、忽ち瞭原の火の如く弘まつて行つたのである。即ち佛教の本旨は、傲慢なる波羅門僧侶の階級支配制度を打破し、スードラ以下諸族の社會的解放を計り、階級の如何を問はず何人も心を澄ませば、平等に涅槃に入ることができるといふに在つたからである。

然しながら間もなく、印度の複雑性のルツボの中で捏ね廻はされ、その宗教思想が無数の分派に分裂對立すると共に、複雑怪奇なる印度教的外被をも纏ふに至つた。

先づ思想の分裂を見ると、先づ小乗と大乘に分れ、そのそれ／＼が又無數に分れて行つた。小乗とは後の大乘派が侮蔑して附けた名であるが、もと／＼佛陀在世中の根本佛教即ち原始佛教を、佛陀入滅直後の弟子が間違なく護持し、教權を確立しようとしたもので、彼等は先づ第一結集を行つて、佛陀の説教を形に纏めんとしたが爲に、單純な清心解脱主義から離れて、形式主義、保守主義、戒律主義に流れたものを指し、従つて又、聲聞乘、部派佛教ともいふ。之れが又、上座長老派によつて唱へられたので上座部と呼ばれ、之に對して同じ小乗であり乍ら、稍々進歩的自由主義的傾向を帯びたものは大衆部と呼ばれた。之が根本二部の分裂となり、それから瑣細な意見の相違で、大衆部、有部、上座部、正量部、經量部の五部（其他二十部ともいひ、或は五百部ともいふ）に分裂し、後期に及ぶに従つて大衆部は微弱化し、上座部が小乗の代表となり、現今セイロン、ビルマ、泰國の佛教に見るやうな、小心翼翼たる戒律宗教になつて行つたのである。

釋迦入滅後六十年、西紀前四世紀の終り近く（前三二六年）に、マケドニア・ギリシアのアレキサンドロス（亞歷

山)大王が侵入し來り、パンジヤブの諸王を率ゆるポーロス (Poros) 王を破り、インダス河上流を横斷して、同地方を占領し、軍を遣し殘兵を以て軍政を敷いたが、此擾亂に乗じて、チャンドラグプタ (Chan Chandragupta 旃陀羅笈多) なるものパンジヤブ地方を收攬し、亞歷山の守備兵を掃滅し、次で東進してマカダ國の首府華氏城を陥れ、シスナガ王朝の後を襲へるナンダ (Nanda 難陀) 王朝を滅して、茲に有名なるマウリア (Maurya 孔雀) 王朝を建て(前三二二年)、その孫アショカ (Asoka 阿育) 王(前二七二—二三二)深く佛教に歸依し、王の力によつて既に思想的に世界教たる佛教は現實的にも世界に弘まつたのである。即ち先王の時代に既にデカンを除く全印度は統一せられ、武力、産業、文化共に大に充實したが、阿育王は、佛教弘布の勅諭を發し、八萬四千の寶塔を建て、千人の僧侶を華氏城に招き、第四回結集を行ふて教義を定め、佛教傳道使を遠く、西はシリア、エヂプト、マケドニア、東はカムボジヤ地方にまで派遣した。

セイロン島には阿育王の弟マヒンダが、經律論の三藏を持して渡島し、國王に迎へられて精舎に住して之を傳へたので、上座系の論が發展し、やがてパーリ (Pali 巴利) 語に翻譯され、西紀前一世紀頃には文字に書寫され、紀元後四世紀には三藏の註釋がセイロン語に譯され、五世紀初(四一〇年)支那から有名なる法顯がセイロンに立寄つた頃、この註釋もセイロン語に譯され、之等がビルマや泰國へ傳播され、今でも此の三地方は小乗佛教が盛んなのである。

次に大乘佛教といふのは、又、自らを菩薩乘、佛乘と稱し、形式的戒律を棄て、根本佛教へ歸り、佛陀の如實の精神を採つて發展したもので、政治、經濟、文化、浮世の中にあり乍ら、即身成佛せんことを念願とするものである。之も無數の經典と宗派に分れ、複雑を究めてゐる——先づ般若經系であるが、之は一切皆空を説き、佛の二夜中間に

互る説法であるとし、之が爾後に發展する大乘經典の根底を爲すから、通佛教といはれる。しかし之も小品般若に始まり、小品般若に進み、遂に玄奘譯十六部大般若六百卷に及ぶに至り、それから異説として華嚴經系（佛陀成道の二七日自内證の法樂を表現したもの）、法華經系（久遠實成の法身佛を明し會三歸一を目的とするもの）、阿彌陀經等の淨土教系等々。第一世紀半乃至第二世紀半に有名なる龍樹が、之等初期大乘を大成し、八宗の祖と仰がれたが、その中、大智度論と中論とが發展の基礎となり、その弟子提婆、羅婆羅が師の中觀派を完成した。次いで勝鬘系、涅槃系（佛陀臨終時の説法を終轉法論としたるもので、華嚴經が成道直後の説法を採るに對立す）出で、大乘は一段階に達したといはれる。

然るに彌勒——無落——世親の師弟出で、瑜伽行派（マハヤナ）を創め、解深密經を以て了義經たる第三轉法輪として、未了義經たり第二轉法輪經たる般若經を完成するものと稱し、無著は攝大乘論を、世親は唯識二十論、唯識三十頌を表はして中觀派と對立し、戒賢知光三時教判の抗争となり、迂餘曲折を経てやがて佛教は衰へた。

その後七世紀頃から眞言系統が行はれ、七世紀半頃には大日經、續いて金剛頂經が現はれ純密教として一系統を作つたが、やがて左道派に轉じ、純密教は却つて支那、日本に渡つて發展し、印度本土では回教徒の迫害に遇つて佛教は全く滅亡したのである。印度教徒に云はせれば、佛教が既に種姓階級制度を否定したことが、印度を秩序づける能力を喪つた原因であり、それが又、佛教滅亡の原因だといふ。

然らば大乘佛教は如何にして、支那、佛印、日本等東方や北方へ傳播したかといふに、それは中央アジアを通じてであつた。上記亞歷山大王の死後、王に代つてシリア以東の地を領したセレウコス・ニカトールは西紀前四世紀末

(前三〇五)に再び印度に侵入したが、チャンドラグプタ王に破れ、インダス河以西を割き、己が女を獻じ、バクトリア(大夏)に残存ギリシア人の國を建てた。然るにやがて支那甘肅邊りから南下した大月氏が大夏國を倒し、その一族クシヤン(貴霜)部は、紀元後一世紀半頃(五〇年)、インダス河上流を征服し、その後此部は引續いてガンヂス河上流をも併せ、茲に大月氏は北印度に大王國を確立した。此の王朝の第三代目カニシカ(Kanishka 迦賦伽)王は、一世紀末より二世紀半の間に、第四回結集を行ふて、經・律・論の異説を統一し、海外に傳道使を派して、佛教を弘布再興したのである。此王の弘布したものは小乗も含まれてゐたが、主として大乘佛教であり、それが東方に隆盛を見たのである。

第二世紀に中印度に榮えた大月氏國では、三世紀に入るとその勢力衰へて、幾多の藩侯亂立割據し、佛教も固陋化して、信仰が廢れた。之に乗じて往古のヴィシュヌ神の權化たるクリシュナ(Krishna)崇拜を中心とする印度教(婆羅門教)が再興したが、華氏城に往昔の孔雀王朝の末裔とする者が、クプタ(C Gupta 笈多)王朝を始め、北方大月氏國の趾に蟠居せるトルコ、アルサク(安息)、大月氏の諸侯を降し、次いで東部印度海岸からセイロン島をも平定し、全印度に君臨するに至つたので、之に乗じて印度教に文學に藝術に、アーリヤ文化は燦然たる光彩を發揮した。

然し五世紀半頃より北方の蠻族たる匈奴種のエフタル(Ephthalites)入寇して再び、國內擾亂、群雄割據となり、七世紀初(六一〇年)北方ヴァルダナ王朝にハルシャ・バルダナ(戒日)王出で、一時隆盛を來たし、唐の玄奘の渡印も此頃だが、王の歿後の印度史は三世紀に互り、再び暗黒時代に陥り、十一世紀の初めより回教徒が侵入し來たつたのである。

回教以下大東亞に侵入し來つた諸民族と思想に就いては、別の機會に譲る。

大東亞共榮圈の民族と思想